

青味がいつた調子で、何だがいやに六つかしそうで、初めから失敗を豫期してかゝつた。

床几を据える、見取枠で見る、鉛筆で輪廓を取る、さて、着色と行つたら案の如く、鱗景の深緑な山のどんよりした色が出ぬ。

あれでもない、これでもない、へたぬりに塗り付ける、しかも盛夏の午後三時頃の日脚はぢりぢり遠慮なく、照り付ける、今は油汗三斗の淺間しき姿となつて遺つて居る。

どうやら喧しいので、氣が付いて、ふりかへつて見ると二三人の子守が早や後ろにのぞき込んで居る、とするうち迎ひにでも行つたものかおかみさんもくれば、興作爺もくる娘もくれば腕白小僧もくると云つた様な、今は後ろに左右に三面より包圍されて風はこず、妙な人いきれが鼻をつく、亦如何ともなし難し。

『マア、みいちやんの家だれ』と、さやくあれば、『これ畑の中に這入りやいけない』と子守を叱る銅磨聲に、びつくりする、逆も完成の見込みはないので、要所だけ仕

上げて、道具を疊み、もと來し道を後戻りせむとすれば、吾等を何と思つてか。『ご苦勞様でした』と云ふおかみさんありけり。

### そのひ

雪の下人

七月七日晴、寫生には持つてこいと云ふ好日和、畫囊を肩に裡町を眞直に賣田山へ登つた、吾島の首夏！木も草も濃綠色だ、涼風がサツト吹く、藥師様の傍の古井戸は何と無く畫趣が充ちて居る、其れを左に見て青い／＼尺にも餘る夏草の中を抜けて高島街道へ出た、路傍には草花を摘む里の乙女の影二三、だら／＼坂を登れば破屋一つ深緑に包まれて何とも云へぬ趣き！暫しこゝに三脚据へて美の園に遊ぶだ、おゝ今夕陽は向ふの山の端から名殘の光を下界へ放つてる……

### 少女の繪

旭川 曉雪

元來僕は繪は好きでなかつた、描きたくも

なかつた、唯他人が描くのを見るのが面白い位、丁度三年の時學校に於て共進會があつて、生徒の製作品を陳列する事となつて各自習字繪畫を描く様に命ぜられた、此の時急に野心勃勃吾が畫を彼の額に入れたいものだと言ふ好奇心が湧いたそこで、色々の手本を見付けるに苦心し、何んでも奇抜なものを描こうと思ひ、少女を鉛筆で描いたが何うしても描けない、一時中止したがやはり僕の野心は枯れぬ。

もう愈々明日は切期限である、そこで夜おそく燈火のもとにかいたところが、偶然にも一寸とうまく描けた様で、少し似ておると思つたから翌日學校に出した所、無事會場に出品せられた。

幸か幸かこれより僕は繪畫の面白いものであるを知つた、以後夢中で寫生した、丁度夏休みに白馬會の中原君が歸省せられて、共に石狩河畔に於て畫架に向ひ種々有益なる事を教はつた、遂に今日では到底筆を放すことができぬ。

### 大失敗

寫生中に子供の集まるのは眞に閉口、何とか工風はないものか、大に苦しんだ上、白銅一個を出して、子供達に昆蟲の採集を命じた處が、七八名は喜んで何處へか往て仕舞つた、ヤレ／＼安心、以後この事／＼と心中に思ひ、天下の妙案と獨り悦に入つた。すると又々一人二人と忽ち澤山集まりかけたので、今度は大一匹壹錢、小一匹五厘で買ふから、成だけ緩々取つてこいといふたら、直ちに立去つた。成だけ蟲の居ませんやうにと心に念じつゝ寫生して漸く出來上りに近づいた頃、幼年採集家は何れも集まり歸たが、採つた蟲の數は大小取混ぜ五十六匹、何れも大物計りて驚いた。随分珍らしいものの中に在て、參考にはなるが、賞金大枚五十六錢は大散財で、ワツトマン二枚許り棒に振つたのは、妙案どころか例によつて大失敗であつた。

青葉集 (その二)

言 祿 生

△繪を習ひし爲め得し利益甚だ多し、獨立獨行の偉大なる精心を養ふは其の一なり。

繪畫は獨創を尊ぶ、他人の模倣は最も嫌ふ所なればなり。

△我一日河邊に釣師をスケッチす釣師大いに恐る、畫く者悪しきか恐るる者無理なるか(終)

探勝だより

北多摩山 本野 琴

僕等は午前十一時有名なる甲府驛へ着いた直ぐその足で目的地點たる御嶽山へと行軍(?)を初めた。登山地點たる和田峠を越すとかの有名なる日本三急流の一たる富士川へ、一直線に射るが如く流下する荒川の沿岸へ出たのである。この荒川こそ御嶽山沿道に於ける絶大の配景となるのである。見よ／＼、全山悉く花崗石で包まれた荒川の急流には、その眞白な大岩石が人目を眩ずる許りの白光を放つて、横ばり、その間を直下する丈餘の奔潭は、岩を噛んで飛沫と化するの、時ならぬ白雪時ならぬ落花を現じ、雲烟飛沫、斷崖模湖として、遠く聞こえるのが、その名もきよき仙娥瀧で、近く聳ゆるのが、昇仙峽随一とも云ふべき覺圓峯である。僕等はもう、仙化した氣で、得

意の口先で、『あゝ新耶馬溪!』と三呼した。こんな絶大の偉觀がドコにあらうか、僕は幽邃な美觀がドコにあらうかと、僕はポーッと迷郷を辿りながら、スケッチ一つ出來ず、沿岸の流を溯ること、五里許りて、幽靜無限な御嶽の金櫻神社に着して參拜後大黒屋と云ふ、旅館に投宿した。

この夜、僕等は思ひ／＼に、途中紀念スケッチを繪ハガキにして、自慢氣に、故郷の友へ送つてやつた。

若葉會報告 (通信)

今般水戸中學に於て五年生の有志發起となり、水彩畫の進歩發達を謀るの目的を以て若葉會と申す團體を組織し、各自の寫生畫を集め、肉筆の雜誌となし、毎月一回發行する事と定め巡番に會員に廻送して互に批評を加へると云ふ規定に致し、去る六月二十二日を以て若葉會第一集を發し申候。集る所の繪畫廿點、忠實なる寫生あり、洒落なるスケッチあり、中々面白く御座候。目下會員は五年生のみにして僅か九名斗りに候へ共、何れも皆非常なる熱心家なれば、將來有望の團體と存じ候儘、一寸御報告に及び候。

水戸中學 大橋三平氏報